

---

# 荀公達の憂鬱～真・恋姫†無双

夏蘭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

荀公達の憂鬱〜真・恋姫十無双

### 【Nコード】

N8348Z

### 【作者名】

夏蘭

### 【あらすじ】

30代の元オタク青年は、日々の息苦しさを感じながらも、いわゆる真面目な生活の果てに、妻子を庇い交通事故で死亡する。

開放感と偏愛する妻との別れの淋しさに戸惑う彼を、『外史』というゲーム発の肥大した概念が取り込み、彼は、荀攸、字を公達として、かの三国志のパラレルワールドへと飲み込まれていく。

真っ白な世界で真っ白な漢女で（前書き）

よくある転生ものですね。軽い気持ちでお読み頂けると嬉しいかな。

## 真っ白な世界で真っ白な漢女で

「ふむ…ダーリンに比べるとパツとしないオノコよのう」

車に刎ねられ、薄れゆく意識の中で、

妻子が助かったのを辛うじて見届けたすぐ後に、自らの生を終えたはずの俺が。

なぜ、今、目が覚めたような感覚を持っているのか。

まして、瞳を開いていなくとも分かる、この特徴的な話し方。

野太い声の癖に、しっかりシナだけは作っているから、余計に気味が悪い。

…これ、間違いじゃなければ、師匠っぽい声のあの漢女だよなあ。

あー、子供が産まれる前はいわゆるオタクだったから、判るんだよ。

いわゆる18禁って奴にも普通に手を出していたし、

三国志とか信長とか、ああいうスルメゲーも大好きだ。

流石に遊ぶ時間は減ってたけどな…子供が産まれたら、

育児放棄でもせん限りは自然とそうなってくる。

が、今はそれが問題じゃない。

薄目を開ければ、邪馬台国にいるような白髪の男。見事な髭。燕尾服に海パン。

うん、立派な変態だ。じゃない、ビンゴだ。

死後の世界がこんなのでアリかよ。

「しかし、ダーリンとは違い、大人の男性の色香もまた…」

うわぁ、頬を染めるな。くねくねするな。

…ゆっくり永遠の眠りにつけると思ったけど、そもいかないか。

「ずいぶんといい趣味をお持ちのようで」

「むむっ!？」

事故にあったはずの俺の身体は、激痛の欠片も感じていない。

現世で万が一、生き残ったとすれば、呻くことすらままならないはず。

あえて、一気に上半身を引き起こす。

警戒したんだろう、二歩ほど引いてくれた。…精神衛生上、ほんとに助かった。

「うわぁ、傷一つないぞ…おまけに、真っ白な世界に目の前に漢女  
って、

新しい地獄が始まったとしか思えん」

死んだ、って自覚がある。だから、妙に冷めてるし、取り乱すこともない。

夫として、父として、最低の義理は果たせて死ねた。人としては真  
つ当な理由で逝けた。

そりゃ、もうちょっと生きていたかった思いも無いわけじゃない。  
ただ、自墮落に生きて、のたれ死ぬことを肯定していた時期から、  
妻に出会ったおかげで更生はしたけど、正直、全うな生き方がどこ  
か息苦しくて仕方なくて、

それでも、投げ捨てられる程には情を捨てられず。

一粒種の息子についても、父親の役割はやってるものの、妻のように無心の愛情は持てず、どこか義務感に縛られていて。突っ込んで言えば、妻の非難を恐れたから。妻に軽蔑されるのを恐れたから。

妻への依存を自覚する自分が、子供を愛しきれないことを妻に問題視されるのが怖くて。

必死に愛するふりを続けた。

いつか本物になればいいと思いながら、そういう変化すら感じず。三年近くがあつという間に過ぎていた。

こうやって文章にして考えると、俺もいい感じに歪んでるな。

まあ、それはこの場では置いておくべきことで。

「なあ、あんた。俺は死んだんだろ。俺の妻と子は無事だったか分かるか？」

「むう。亡くなった者は通常、もっと慌てたり取り乱すものなのだが。」

「だが、まずは問いに答えよう。安心せよ、お主の妻と子は無事じゃ。」

「…そうか。死んだ甲斐があるってもんだな」

「他人事のような言い方だのう」

「極論を言えば、妻さえ無事ならそれでいいんだ。

それに付随する者もついでに守っただけの話で。

とにかく…教えてくれてありがとな。

嘘を言ってる様子もないし、こういう問いの答えを偽る性格でも無さそうだ」

俺の言葉に反応した卑弥呼（？）の困惑顔って奴は設定に無かった  
気がするが、

これはこれで貴重なものを見た。

さて、どうせ死んでるんだし、魂とか消される前に、聞きたいこと  
は聞いてみるかな。

やっぱり、転生なんですか？（前書き）

さて、外史に落とすところまではサクサクいきましたよ。



やっぱり、転生なんですか？

「ところで、外史の管理者たる貴方が、  
なんで交通事故で亡くなった冴えない中年前の男の所に現れたのか。  
早速理由を聞かせてもらえませんか？

大した理由が無ければ飽きるほど泥のように寝たいんですが」

とある病気で、殆ど自主的な寝たきり状態にもなったことがあるが、  
あの感覚に似てる。

それに、早く意識を飛ばさないと、色々まずい。思いを馳せたら、  
もうヤバイ。

「既に儂のことも知っておるとは。貂蟬め、何を考えておる…」

一番最悪なのが外史に飛んでくれうんぬん…って奴だ。

あの一刀くんみたく主人公補正もなく、現代で武道の有段者だった…

なんてこともない俺が、あの世界なんざ行っても殺される。

恋姫たちはモニターの中だから愛らしいのだ。

実際に相対したりしたら、ただのモブである俺なぞ一捻りで首チョ  
ンパか、

謀殺されて、どこかの路地裏でぽいっちょであるのが関の山である  
う。

「ハッキリ言うオノコよのう」

あれ、口に出てたか。まあ、そんなわけで行きたくはないのですよ。  
それこそ、なんかのチート…いわゆる反則能力とか、

種馬君のような、一撃必殺の笑顔であるとか。

そんなものがあって、やっと舞台に立てる程度のもんでしようし。

「だがのう、既にお主はこの狭間に呼ばれてしまっておる。正史の時間の流れから逸脱した存在になっておるのは、お主も自覚しておるのではないか？」

「…嫌だ、と言ったら」

「儂らが適切に外史に送り込まずに、放置された迷い人は、永遠にこの狭間を彷徨うことになる。

この何もない真っ白な世界に、一人。儂らも迷い人になれば、見つけることは困難になるう」

うわあ、気が狂ってそのままバッドエンドですか。

拒否権無いじゃないですか、やだー！

「現実逃避は良くないと思うがな。まして、儂の姿を見ても慌てる素振りも無いのだし、

流れも薄々予想できていように」

…ああ、こんちくしょう。

自分勝手にやるからな！ やつと解放されたんだ、まともな生き方なんか真っ平だ。

引きこもり生活実践してやるからな！

「お主を外史に誘導するように指示した者からは、特に何も言われずにおらぬからな。

ただ、お主の向こうでの生まれなどは決まっておる。

そろそろ時間が無いので、駆け足で説明するぞ」

説明の内容をまとめると。

この場所は、外史の狭間。

一刀君がしょっちゅう出入りしては記憶消されて、送り出される場所。…悲劇やな。

管理人の卑弥呼さんの自己紹介。ようするに予測通りですよっと。

外史の想念って奴は実際存在していて、例の会社がたまたま近い概念でゲーム化したから、

より明確に実体化し易くなっているし、正史から人が招かれる下地も整いやすくなっていること。

…まあ、無差別に、ってわけじゃない、ってことだが、はた迷惑なことこの上ない。

もう、10代の英雄の存在に心のどこかで憧れる時期なんぞ、とっくの昔の話だ。

んで、俺は荀攸、字を公達として、あの外史に降りる。

…明らかに霸王様に近い位置じゃないですか。引きこもり不可っぽくね？

まあ、頑張って阿斗ちゃんっぽく生きるだけだけどさー。

荀家って時点で、ニート生活無理っぽくないか…司馬家なら大丈夫だったのに！

赤ん坊スタートだけど、記憶がハッキリするのは物心ついた頃からってことだが、

うわあ、いろいろ嫌すぎる…猫耳軍師の幼少期と関わるなんて勘弁し…。

「では、行くぞ！」

「どわあああああああ！！！！」

回想途中で、俺は時空の渦に飲み込まれ、強引に意識を失うことになるのだった。

「貂蝉…『ご主人様』の為とはいえ、

外史の始端と終端の存在以外に、

修正力を背負わせることなど…本当にできているのか？

確かにあ奴は自身の存在が消えることに無頓着な所があるようだが、だからとはいえ…まして、あのような異端の力をどう使おう…」

白の漢女の独白なんか、俺に聞こえるはずがないのだった。

やっぱり、転生なんですか？（後書き）

さて、引きこもり生活の実践は出来るのか？

荀公達として絶賛引きこもりたい(前書き)

桂花の親はかくあるべき。

\*\*\*\*\*

当時の儒家思想を考えると、流石にどうなんだって設定があります。それゆえの恋姫無双を題材にした二次創作ではありますが、気に触る方は閲覧を控えて頂けると幸いです。

## 荀公達として絶賛引きこもりたい

ういす、とある外史の荀公達です。

あ、外史であっても、三国時代は『名』が真名並みに、公式の場では、場合によってそれ以上に重要視されているから、うっかり『荀攸』さんなんて言ったら、即村八分だから注意な。下手したら即斬られても仕方ない。これ豆知識。

大体、満三歳ぐらいで大凡の記憶をしつかり認識したんだけど、そんな時にはこの外史の両親が既に亡くなっていたという…。

完全に以前の記憶を認識しつつ、荀公達として立ち回るようになって頃には、

俺は荀昆さんという親戚の家に引き取られていた。

字は教えてもらえてないんだよな…。理由は後で説明するんだが。

(作者注：正しくは『昆』の文字には糸偏が付きますが、常用外漢字の為この表記を使います)

覚えていないから悲しがるも何も無いんだが、まあ、儒家思想ってのが強いこの時代。

遅いかもしれないけど、物心がついた今から三年間は喪に服す、なんて言ったら、  
なんて孝行者なんだろう、ってことで、絶賛引きこもりが許された。やったね！

流石に食事を含めた身の回りの世話やら、屋敷の中で引きこもるに困らぬ竹簡やら、

この時代では貴重な紙で出来た書籍の山であるとか、

そういう手配はしてくれたから、退屈することもなく。

この世界の常識とか、文字とか、学問とか、知るには事欠かなかった。

元オタクの俺はゲームのみならず、

雑学とか知識を仕入れるのに楽しみを覚え没頭するタイプであったから、

『ばつちこーい』ってなもんだったのだ。

食っちゃ寝しながら、好きな本を好きなだけ読んでいられる。

そんな本の虫となった俺に、荀昆さんもドンドン読み物を差し入れてくれる。

環境としては、本当に恵まれていると言えた。…言えるはずだ。

「夏蘭かいらんは文若のいい先生になってくれそうね。母として花が高いわ

」

「義母上…、私ではとても務まりませんよ」

「そうやって謙遜する夏蘭は可愛いわね。ふふ、銀花ぎんかと呼びなさいな。

他の目が無い時ぐらい…」

うん、変態（ドM百合）の親はやっぱり変態シヨタクンだったんだ…。

義父もすんげえ童顔だしさ、性徴が始まったら、私の側室になりましようね…とか、

こっちが分からないと思って、赤裸々な欲望丸出しなんです、ええ。

ただ、これで齊南郡の太守業務を、

桂花が産まれるまで見事に統治していた優秀な文官であることは知られていて。



さすが、神君の娘『八龍』だと民達に絶大な人気を誇っていた。

桂花産まれたから、普通の母親になります、とかなんて言って職を辞した時はかなり騒動になったとか。ただ、辞めた本当の理由が、当時孤児となった俺の光源氏計画を発動させる為、

というのは、俺や義父上しか与り知らぬことである。

俺の記憶を持っていない普通の公達くんがいる外史だったら、たぶん世に出てくることはなかっただろう…。

あ、だから、原作の恋姫の世界で苟公達がいなかったのか。

…おっそろしい外史の暗部だな、おい。

字を教えてもらっていないのも、真名で呼ぶことを強要されているから。

俺の真名を覚えてくれたのはこの人なんだが…ほんと、どんだけだよ！

必死に『義母上』と呼んで自衛を図る日々です。

二人きり…いや、母上の背中には桂花がいるんだが、

実質二人きりの時に義母上…銀花さんの名を呼んでしまえば、

俺の外史人生終了のお知らせが待っているのだ。

桂花が歪んだ理由…絶対、この人のせいだよ…。

荀公達として絶賛引きこも…りたい(後書き)

この親してあの娘あり…。

**貞操の危機回避に身体を鍛えよう(前書き)**

公達くんは身体を鍛えるようです。

## 貞操の危機回避に身体を鍛えよう

絶賛引きこもり期間継続中の俺だけど、  
欲望を隠そうとすらしなない銀花さんに対し、  
俺は子供の振りして、光源氏とか側室なんて判らない風を装いつつ、  
毎日にじり寄ってくる危機と戦っていた。

俺の髪に触れたり、俺を母親の抱擁とか言いつつ抱き締める時の銀花さんは、  
頬が判り易く紅潮していて、瞳もハッキリと潤んでいる残念っぷり。  
吐息も明らかに熱が籠っているし、耳元で艶のあるため息を付いたり、

『我慢しなくてもいいのよ、いつでも受け止めてあげるわ…』とか、  
露骨に誘惑してくる変態っぷり。

学を教わる時とか、誰か人目があれば完璧な淑女を演じきってみせるし、  
隠遁したとはいえ、来訪するかつての仕事仲間にも惜しみなく知恵を貸すし、

旦那さん：義父との仲も変わらず良好なので、  
俺に感じてない時は、実に堂々たる荀家の長を務めているのだ。

普段は尊敬してるし、孤児の俺に並々ならぬ愛情を注いでくれてるし、

感謝こそすれ、嫌う事はない。

今はあまりに非日常すぎて、妻に二度と会えない寂しさを思い出す時間も、

結果的に少なくなっているから、変に落ち込む時も少ない。

だから、俺は彼女を拒否はしないんだけど…。

「だって、夏蘭に完全に堕ちて、  
貴方だけの雌豚になったら、貴方は私を軽蔑するでしょう？」

別の意味でも淑女過ぎるわっ！ 勝手に心の眩きを覗くなっ！  
たかだか五・六歳のガキんちょにそんな言葉を使うなあああああ  
ああ！

俺は間男なんかになる気は無いんだっ！

・・・ゼーはーゼーはー。

「ふふふ、興奮した夏蘭も可愛いわ…ほんと食べてしまいたい」

「ほんとに義母上、真っ当に生きて下さいよ…。

桂花がもう少し大きくなって、今の義母様の状態を理解すれば、  
私は彼女に憎まれかねません」

「あら、夏蘭は親子ど…」

「望んでませんっ！ どうしてそんな発想になるんですか…」

この外史の女性に漏れず、銀花さんも細身の身体に恐ろしい筋力を  
秘める。

子供の身体の俺ごときがいくら暴れようと、容赦なくロックされた  
ままの状態で。

文官のこの人でこれだから、武官連中なんぞ想像もつかん。

うん、今も銀花さんの膝の上だよ。両腕にがっちり捕まっていますと  
も、ええ。

桂花に因んでなのか、母たる彼女は金木犀に似た、何ともいい匂い

がする。

ほんとはこの香りに安堵して眠ってみたいと思うこともあるが、さすがの俺も、このガキの年頃での腹上死フラグは全力で回避する。

翌日。

俺は義父の元に密かに足を運び、

鉄扇と今の背丈に合う模擬刀を用意してもらおうようお願いした。

義父は複雑な表情をしながら、一両日中に手配を終えてくれた。

「銀花を受け入れてくれていいんだよ？」

彼女は狭量じゃないから、公達に溺れたとしても、

私への愛情はまた別にしっかり育むことが出来る女性だ」

いやいや、義父上。むしろそこは全力で止めて頂きたいのですが。

「だって、銀花は君の居室に通うようになって、また一段と綺麗になったもの。

桂花を産んだとはとても信じられないほどに。僕としても嬉しいんだけどなあ」

理解力ありすぎですうううううううう！！！！！！

俺は部屋の中での素振りと、

読書時にも鉄扇を持ち、常に腕を鍛えるように心がける日々を始めるのだった…。

さすがに命の危機を感じると、前世でやったことのない鍛錬って奴も、

自然に続くもんなんだよ…いや、必死さって大事なんだねハハハ…。

「夏蘭が筋肉むきむきになるなんて、私は許しませんよっ！」

「嫌いになりますよ、義母上」

「うわーん！ 夏蘭に嫌われちゃっつ〜！」

マジ泣きである。

20歳以上のはずなのに、  
なんでこうも少女のように泣くのが似合っつんですか、義母上…。

「大丈夫、最低限自分の身を守りたいと思うだけだから。

だから、安心して。『銀花』」

こんな時は真名呼びと頭を優しく撫で撫での連携攻撃と、対処方法  
が決まっている。

どうしても機嫌を損ねてしまった時に、真名を呼び捨てないと許さ  
ないとまで言われ、  
それ以来、こんな感じで。

「え、えへへ…夏蘭が真名を呼んで、頭撫でてくれる…」

うん、確かに可愛いと思うんだけどさ。

外面が子供でも、俺の中身は立派な三十代のおっさんなわけさ。  
保護欲も沸くつてもんなんだけど。

五・六歳の子供が大人の女性を、真名を呼び捨てながら、頭を撫で  
続ける情景って、

うん、ありえんわ…。

## 貞操の危機回避に身体を鍛えよう（後書き）

人間追い詰められると、今まで出来もしなかった事が、急に出来る様になることがあるのです。



緩やかに日常は崩壊していく(前書き)

引きこもり生活にも陰りが見え始めます。

## 緩やかに日常は崩壊していく

喪が明けて、俺は八歳になりました。

叔父さんが酔った勢いで刃物を振り回し、桂花に当たりかけて、とっさに庇った結果、俺の耳が傷つくという事件もありました。史実通り、叔父さんには伏せるといふ話になったので、それを理由に引きこもり生活は無理やり続けています。

…といつても、邸宅から出ないだけの話で。

いや、荀家の邸宅は、現代の一般的な小学校ぐらいの広さがあるので、

運動するにも何も困らないのです。

中庭を走り回るだけで、十分な走り込みができるぐらいに。

少年期だからなのか、ある程度鍛えても筋肉隆々になることもなく、義母上も最近俺の行動を咎めずに、

「額から流れる夏蘭ちゃんの汗をペロペロしたいわ…」と、おっと…いつも通りだった。

過剰なスキンシップと思いついてから、既に三年余り。

発育も順調に進み、身長4寸（120cm）程度となり、さらに鍛錬の成果が出始めて、

行き過ぎる行為には少しずつ抵抗も出来る様になってきているが、義母上はどこぞからか関節技を学んできて、

日々の戦いは一段高い極みに届こうとしている。…どうしてこうなった。

…俺の成長が嬉しいと言うのなら、諦めてくれるのが一番嬉しいん

ですがね、義母上。

こんな変態の義母上も対外的、突き詰めて言えば、俺以外には相も変わらず、

見事なまでに荀家の長を務め続け、

義父との間に新たな子供：荀甚じゆんしんが産まれている。

正史では、荀或じゆんいくの兄弟、袁紹の参謀になった人物だな。

まあ、夫婦仲は良好なわけだ。

「夫への愛と夏蘭への愛は別腹なのよ…！」

「うん、義母上。

そろそろ、文若もその意味がほんのりと判るとも限らないから自重して下さい」

「なによー。その辺りは夏蘭がちゃんと教えてくれればいいじゃないー」

二人の子供を産んだのに、

年頃の娘さんと変わらぬような体型、風貌を保ち続けているこの人は、

別の意味でも人外の域だと切に思う。

というか、俺の前では完全に精神年齢が子供に近いものに戻っているし。

日々のストレスを発散しつつ、俺から精気を巻き上げている錯覚すら覚える。

触れるだけで、道教で言う『氣』って循環するんだっけか？

「第一、桂花も貴方にべったりじゃない」

「兄として慕ってくれているようですね、ありがたいことだと思いますよ」

義母の真似をして、

桂花が俺に日中はほぼべったりくっついていてる状態になってからは一年ぐらいか。

影響受けるだろうとは思っていたが、やっぱりな、という結末である。

懐かれるのは嬉しいものだし、俺からすると娘が出来たような感覚で、

愛らしく感じているのだが、さて、いつ頃彼女本来のツンが出るこ  
とやら…。

「…ねえ、夏蘭」

「なんでしよう、義母上」

「以前から思っていたの。桂花は聡い子だけど、すごく気難しい所がある。

だけど、貴方は少なくともあの娘に慕われているし、既に真名も許された」

「…真名の本当の意味合いをまだ、文若は判っていないでしょう。だから、私も実際に呼びはしませんし、私も自分の真名を許していない。

その辺りは少しずつ、理解してくれればと思っています」

本人には、文若と呼ぶのが当たり前になっているから、と説明はしている。

ただ、彼女自身は納得はしていないし、今後の彼女の成長に合わせて、対応を一步間違えると、どこぞの種馬君みたく日々罵倒される立場になるのは想像に難くない。

「そう。その物言いもそうなのよね。」

貴方の前では、私は子供に戻る感があるし、それを自覚している。それを問題なく受け入れてくれる貴方を知っている。

：ただね、貴方はまだ八歳の少年。

五歳児の頃には、今の雰囲気や話し方が完成されていたわね。

ただ、それはとても異常であるということを実感している？」

喪中とか、叔父さんに気取られないようにとか、

色々理由をつけて、引きこもり万歳だったから、

基本会話を交わす相手も、義母上とか、本当に一部の人に限っていたこともあり、

全く子供っぽい振る舞いはせずにきたからなあ。

屋敷の使用人の人達でも、会話をしたことのある人自体が殆どいないこの事実。

まあ、いずれ問われるとは思っていたけど。屋敷を出て行くのは意外に早くなりそうだな。

ただ…泣きそうな声色で、問いかけるのは何故なのですか、義母上。

緩やかに日常は崩壊していく（後書き）

珍しく母親モードの荀昆さん。

\*\*\*\*\*

荀甚じゆんしん、荀或じゆんいかくは当て字です。

機種依存文字になるから、文字化けしてしまう為ですね。

## 問答（前書き）

引きこもり生活とも徐々にお別れなのです。

## 問答

「桂花や友若のあやし方や、

おしめの世話にしても貴方は本当に手馴れたものだった。

一度見て覚えたというけれど、あの手際の良さは異常に映る。

寝かしつけにしても、あの人よりも上手なもの」

「子供らしくなくてすいません」

「いいえ、詫びるべきは私であり、夫であるべき。

貴方はその年にありながら、立ち振る舞いや精神面は立派な成人であり、

時に老獪なものすら感じられる。

子供の背伸びなどでは決して無い、ある種完成されたものだわ。

その包容力に、私達一家は甘えているに過ぎない」

「買い被りすぎです、義母上。

赤ん坊の泣き声に苛立ちを隠しきれない子供ですよ、私は」

「でも、その苛立ちを、貴方は桂花や友若にぶつけることは決して無い。

おくびにすら出さない。

赤ん坊はそういうものだ、貴方はしっかり飲み込んでいるからよ。

桂花の夜泣きで眠れる夜を過ごしていた私達を見かねて、

一日置きに離れにある貴方の居室にさも当然のように引き寄った貴方は、

あの時、私達の誰よりも親らしかった」



「軽率であつたと思います。子供の振る舞いとしては気持ちが悪すぎる」

罪滅ぼしの代償行為だつた。

前の世界で、息子に対して事務的な父親の接し方しかしてやれなかつた。

二度目ならば、もう少しうまくやれるだろうと、

そんな俺自身の、自己満足の為の我がままだつた。

この世界で、義母上が過剰ながら惜しみなく与えてくれた愛情に、妻と会えぬ寂しさを強く感じずに過ごせた、せめてもの恩返しのもりだつた。

ただ、五・六歳の子供が乳児の世話を完全にしてのけるのは、明らかに異常であつたのだろう。

乳母に任せる選択肢ももちろん取れたはずだ。

可能な限り家族で育てたい、

そう願つた義母上の希望を勝手に掬い取つた、俺の身勝手であつた。

「いえ、私こそ本当にごめんなさい。私は、夏蘭に亡くなった父の影を見ているのよ。」

だから、必要以上に我侭になり、童心にも容易く帰ってしまう」

「それで、良いのですよ。」

その代わりに、私の異質さを飲み込んでくれていたのでしょうか？

…いつか、この家を出る前には、全てお話ししたいと思います。

それまでお待ち頂けませんか、銀花」

彼女の頭をなけなしの胸板とまだ短い両腕で包みながら、俺は静かに告げた。

もう少しだけ、この穏やかな日々を、続けていたい。それは偽りぞぬ本音であったから。

「こんな時だけ、真名を呼ぶなんて、本当にズルい男性であること。まさかと思うけど、この年で貴方、こっそり女を誑かせたりしていないでしょうね?」

「無いですね。男として、子を成す事すらまだ出来ない未成熟な身体なのですし。」

仮にそういう欲も制御する術も心得ていますから」

「…夏蘭。本当の貴方は、一体何歳ぐらいなのかしら」

どうしようもない、悲しみの色は消えているように感じる。率直な問い。秘密を共有したい、そんな希望といったところなのか。いつもの義母上の調子が少しだが戻ってきている。

「四十にまもなく手が届くといったところですよ。ただ、無意味で年だけを重ねても、大人には成り得ない、それぐらいは判っている、ということでしょうか」

「成る程、私が適わないわけね。」

…夏蘭、貴方が秘め事を明かしてくれる日を待っているわ」

この夜以降、義母上は私を外出時や、元部下の訪問が合った時などに、

従者の一人として、常時同行させることになる。

俺には、独立した後の為に、密やかに人脈を築かせる為。

義母上は、俺を密かな相談相手として。

そりゃ子供を相談相手にしようなんて、普通考えられないからなあ。

隠遁生活のお陰で、俺の事は荀家以外には知られておらず、武経七書や五経、孟子や左伝などを読破して、義母上と政策論議に興じていることなど、世間様は知らない。

この時代の知識人を直に見て、自らの知識と知恵を精錬させつつ、その知恵を披露して実践する機会を、義母上は作ってくれたのである。

「ふふん 私だけが夏蘭が神童たる存在であることを知っている。

なんとという甘美な秘密なのかしら…」

まあ、外出時も油断すると通常運転になるので、その辺りの気疲れは増える事になったのだけど、それは別の話だろう。

## 問答（後書き）

銀花義母上の個人的な相談役ポジをやりつつ、この外史を見ていくことになりそうです。

さて、幼女なオーホツホとか霸王さまを描くのであろうか。  
これじゃまるで幼女無双じゃないか・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8348z/>

---

荀公達の憂鬱～真・恋姫†無双

2011年12月31日02時45分発行